

地球上における生物(動物及び植物)の進化は、環境の変化と生物の独自努力によって、平常時間(生物が生きていく上で平常な状態での時間経過)の中で長い歳月をかけ少しずつ行われてきたと考えられていました。かつて、生物の進化はDNAによって伝わるため長い時間を要するので、劇的な地球上の変化が起こると生物は死に絶えてしまい、進化の継続性がなくなると考えられてきました。

地球上の劇的な変化の1つである巨大隕石の落下のサイクルは、太陽系には木星と土星の巨大惑星があるため5,000万年か1億年に1回と言われています。もし、木星や土星といった巨大惑星が太陽系に存在しなかった場合は、5万年に1回の頻度で地球に劇的な大変化が起こると言われています。地球上に劇的な変化が生じるのは5,000万年から1億年に1回という長いサイクルであったので、安定した地球環境が長期間続き、それによって種が死に絶えても新しい種が出現することが可能となり、長い時間をかけて進化していくようになったと考えられました。

しかし、生物の進化のメカニズムは、平常時間に比例して起こる進化が全てではありません。非常時に起こる進化(進歩)もあります。例えば、江戸時代や平安時代は、300年間大戦争がなかったため文化は大いに成熟しましたが、戦国時代や第2次世界大戦の非常時にもまた文化(兵器と兵器技術の応用による生活文化)が大発展しました。実は、平常時間の持続による進化よりも、非常時を克服してきた進化の方が、はるかに進化は著しくなるのです。巨大隕石が地球に衝突して地球の環境が変わり、ある時には地上が火の海になったり、またある時は地表が氷の海になったり、生物が生きていけないくらい地球環境が悪化したこともあります。しかし、生物は火の海、氷の海でも懸命に生き延びてきました(そのような状況下でも生物は地中深くに生きてきたそうです)。このように、生物の進化は、劇的な地球環境の変化があったからこそ加速したのです。劇的な地球環境の変化に適応(対応)できなかった生物は淘汰されました。しかし、劇的な地球環境の変化に適応できた生物は、その後、地球環境が良くなった時にさらに大進化し、大繁栄しました。その典型的な生物は哺乳類であり、哺乳類の一種である人間です。哺乳類は6,000万年前に地球に巨大隕石が激突し、地球上から酸素が激減した際に、母体の中で親が呼吸で酸素を吸い胎児を育てる仕組みを進化させました。卵で生まれる爬虫類の恐竜が減るなかで、哺乳類は一挙に繁栄しました。そして再び、熱帯雨林が草原化する変化の中で、哺乳類の中でも二足歩行する人類が生まれ、知能を発達させ、今日に至ったわけです。

つまり、変化が起こった際に、その変化に適応し新たな機会をモノにすることが進化を早めることとなります。そして、異常時に変化に適応できなかった生物は淘汰されるのです。まさに、ダーウィンの進化論の「強者が生き残るのではなく、変化に対応したものが生き残る(強者は進化する必要がなく、栄えすぎて進化することを忘れたものが滅びる)」という考え方に結びつきます。

私の好きな言葉に「活路」があります。活路とは、「過去の価値観が通用しない激動の中で、今後何が一番必要であるかを見抜き、次の時代への大きな転換をチャンスに変える方向性のこと」(小山政彦・リーダーの条件より)であり、まさに変化 対応 勝ちパターンメカニズムを言い表した言葉です。

国家も会社も個人も、大変化(戦争、不況、転職、自らを取り巻く環境の変化)の中で、変化をチャンスと考えると、平常時よりも大発展します。SCも、競争相手が出店することは、競争環境の変化と考えて克服すると競争相手がいない時よりも発展することができます。課題とは、解決するために存在するのであって、課題を解決したSC(変化に対応できたSC)は新たなライフサイクルに突入し発展します(六車流：流通理論)。

明治維新の思想家である吉田松陰の松下村塾(松陰塾)で、6ヶ月間の短期勉学で多数の人材が育っていきました。それは、日本が徳川幕府から明治時代への変革期という非常時であったからこそ、松陰塾の誕生が国家的人材を輩出できたのです。平常時では、いくら吉田松陰が素晴らしい人物でもそのように国家的人材を多く輩出することはなかったでしょう。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>\*3</sup>  
代 表 六 車 秀 之